

— 大熊町でイチゴをつくろう —

大熊町は、東日本大震災及び原子力発電所の事故により、全町民が町から避難せざるを得ない状況が約9年続きました。

2019年4月10日、大熊町大川原地区・中屋敷地区の避難指示が解除されることとなり、2020年3月5日には大野駅周辺の避難指示解除、3月14日にはJR常磐線の全線開通と、徐々に復興への歩みを進めています。ネクサスファームおおくまは避難指示解除に先立ち、2019年4月1日から、大川原地区でイチゴの高設養液栽培を始めました。

— 故郷を再建する、町に農業を残す —

大熊町の強い想いに後押しされ、帰還する町民や新しい町民を雇用し、町民の力で大熊町に新たな産業をつくろうと、8人の従業員が集まりました。

平均年齢35歳の従業員は、そのほとんどが農業未経験者でした。大熊町で栽培を始めるまでの2年間、各地の施設を調査し、施設や設備、作型や品種、栽培方法、オペレーション、販売などを経営的視点で徹底的に思索し、植物について学び、イチゴを実際に栽培しながら準備を進めてきました。

— この町でしかできない、新しい農業の形をつくろう —

個人農家、家族経営農家ではない「企業農業」。その難しさは農業に進出する多くの企業が直面している課題でもあります。

この町でゼロからすべてを始める為「どのようにすれば企業農業が成り立ち、企業として社会に必要とされ、雇用する従業員を守り、安定経営が可能になるのか」そう考えて事業計画や施設・設備の設計が立てられています。

植物工場と定義される太陽光利用型ハウスは、一年中イチゴを生産できる設備を整えてあります。ハウス内の環境やイチゴの栽培自体はコンピュータによって管理されており、「機械と人が仕事を分業する」形をとっています。農業ではまだまだ人の手が必要な仕事がたくさんあり、それができる人財を育てなければ、次世代の農業者・農業経営者がいなくなってしまうと感じています。高齢化が進み農業人口が減る中、雇用を生み、生産性を上げ、人財を育て、安定して経営する為には、機械化だけを進めるのではなく、人を最も重要な会社の財産であると捉え、人に投資し、強い組織をつくりあげなければいけないと考えています。

そして働く人が物心両面で豊かになれる会社、働く従業員が仕事を楽しめる会社になりたいのです。

— 安心して食べていただけるイチゴを —

目に見えないことで不安を感じる放射性物質について、弊社では万全の検査体制を整えています。地域や場所に対する不安を払拭する為、イチゴを生産するハウス内や敷地内の空間線量を定期的に検査し、問題ないことを確認しています。

イチゴの原材料となる、苗や培地、水も検査し、安全を確認しています。また、収穫したイチゴは全量検査を行っています。その後、国・県の出荷基準検査を行い、第三者機関の外部検査も行っています。

会社設立時よりG.A.P(農産物生産工程管理)にも取り組んでおり、2020年4月にはグローバルG.A.P認証を取得しました。日本の農業では取得率1%に満たない国際基準の認証を原発被災地域で取得したことは、「安全で品質の良い食品・非食品の農作物であると世界的に認められた」こととなりますので、福島県としても大きな意味があると考えます。

— 必要な時に、必要な量を、求められる品質で、安定して供給するために —

農業は気象に左右されることが多く、昨今の異常気象と呼ばれる環境下では大きなリスクを伴います。しかし、ビジネスとして農業を成り立たせる為には安定品質や供給責任が不可欠と考えています。そのため、弊社では気象リスクを低減できるような様々な設備が導入されています。安定生産と安定供給を可能にする事で、安定した経営と雇用を継続していく事に重きを置いています。

初年度は大熊町の気象条件では難しいと言われた夏秋イチゴも、この地域ではじめてつくる冬春イチゴも生産することが可能であると確認できました。改善しなければいけない課題もたくさん上がりましたが、従業員が主体となって常に改善を繰り返し、より良い農業経営を目指そうと取り組んでいる事は弊社の強みです。

操業からまだ1年ではありますが、多くの方々に支えられている私たちが、共に仕事をす仲間、お客様に、取引業者様に、地域や社会に、どんな恩返しができるのかを日々考え、必要とされる人財、必要とされる会社になれるよう、これからも皆様とのご縁と絆を大切に精進してまいります。

## 震災後のわが社

# 株式会社 株式会社ネクサス ファームおおくま

所在地：双葉郡大熊町

事業内容：いちごの生産・加工・販売

